

『マントのレー』における「誠実」という語の使用例  
——「大切なこと」は言葉で語られるのか？

高 名 康 文

## はじめに

本論は、さきに日本独文学会研究叢書に、同学会でのシンポジウム<sup>(1)</sup>の記録として発表した拙論<sup>(2)</sup>の補遺という性質を持つ。

中世のドイツ宮廷文学における人と神に対する「誠実」をあらわす *triuwe* という概念に関するシンポジウムの中で、私が指摘したのは、コンラートの『ローラントの歌』や、ヴォルフラムの『パルチヴァール』の中で誠実概念は作品中で大きな役割を担い、これを考察するために長大なディスクールが展開されることもあるのに対して、そこに素材を提供したフランスの12世紀の文学ではそのような傾向は希薄であるということであった。

その例としてとりあげた『ロランの歌』においては、*triuwe*と同様に主君と臣下の間の「誠実」も、人の神に対する「誠実」の両方を意味する *feid* という語が、ここで描かれている異教徒の戦いは、キリスト教の神のための戦いであり、信仰がそこでは大きなテーマになっているはずだという現代人の予想を裏切って、「信仰」の意味ではほとんど使われていない。さらに、主君と臣下の間の「誠実」も、「誠実」(*feid*)という言葉そのもので語られることはなく、むしろ、その反意語で、共同体から外れた存在をあらわす *fel*、*felonie* という語を否定することで語られている。中世社会における誠実は、第一には「裏切らない心」というようにネガティブに定義されるものであったという歴史家ガンスホーフの指摘が、この現象の理解を助けるということが、シンポジウムから得られた知見であった。

この研究叢書とシンポジウムでは松原文氏がヴォルフラムの『パルチヴァール』とハルトマン・フォン・アウエの『イーヴェイン』における「誠実」概念を、その原典であるクレティアン・ド・トロワの作品と比較してい

る。ドイツの『バルチヴァール』においては「誠実 (triuwe)」が中心概念になっており、この語が頻繁に登場して、物語の転換点においてしばしばクローズアップされてこれに関するディスクールが展開される。

これに対して、シンポジウムの準備段階で議論したことでもあるが、クレティアン・ド・トロワの『ペルスヴァル』では foi の用例は 62 あるが、ほとんど誓約の定型句であり、また、foi およびその派生語を使って信仰や、誠実とは何かということが語られることはない<sup>(3)</sup>。付け加えるに、不思議なことにその形容詞形の *feel* は確認できない。その代わりにこの作品で「誠実」を表しているのは、ラテン語 *legalis* 「法になかった」に由来する形容詞 *léal*、その名詞形の *lëauté* である。とはいえ、約 9000 行におよぶ作品の中での用例は、派生語すべてをあわせても 9 箇所だけである。松原氏は、さらに、クレティアンの『イヴァン』に関しても調査をして、ここでも「誠実」は、foi や *lëauté* という言葉で語られるよりは、誠実でないことの裏返しとしてネガティヴに語られていることも指摘している<sup>(4)</sup>。

母親や漁夫王に対する誠意のなさから生まれた損失を回復するための冒険譚、とも読めるクレティアンの『ペルスヴァル』においても「誠実」は重要な概念であることには疑いはないが、この語の出現頻度がこの程度であるのは不思議な現象である。サン・テグジュペリは「大切なものは目に見えない」と言っているが、大切なことはあえてことさらに語られないというのが、12 世紀フランスの物語のディスクールの特徴なのだろうか？

本論では、そのことを逆方向から裏付けるような現象をとりあげたい。女性の男性に対する不実さを語るアーサー王物語の二次創作的な作品『マントのレー』(*Mantel mautailé*) では、1000 行弱の作品中に *lëauté* と *léal* (男女同形単数主格の « *lëaus* », « *loiaus* » という形で出現する) が合計で 13 例も見

いだせる<sup>(5)</sup>。

12世紀と13世紀の変わり目に成立したとされているこの作品は、レーなのかファブリオーなのかというジャンルの問題、同時期に成立したらしい、アングロ＝ノルマン方言で書かれた同様の作品『角杯のレー』<sup>(6)</sup>との影響関係、『ペルスヴァル第一統編』<sup>(7)</sup>や『ラギデルの復讐』<sup>(8)</sup>、『散文トリスタン』<sup>(9)</sup>における同様のエピソードの再録、特にエロティックな場面での写本間のテクストの異同等、さまざまな問題に開かれている。しかし、ここでは *l'œauté* と *léal* という語の出現例をとりあげながら、誠実がないところこそ、「誠実」が語られるという逆説的な現象を指摘することにしたい。

### 『マントのレー』の要約

以下に、作品の内容を紹介する。物語の冒頭で、聖霊降臨祭の季節に、アーサー王は大諸侯会議を開いている。王が集まった臣下たちに贈り物をする傍ら、王妃は臣下たちがつれてきた妻や恋人を寝室に招き、同様に贈り物をしている。翌日の朝、一同は司教座教会に行きミサにあずかり、帰ってくると食事の準備ができていたが、王はなにか新しいできごと（« aucune aventure novele », v.93）が起こるまでは食べる気にならないと述べる。そこに、美しい小姓が馬に乗ってやってきて、アーサー王に対して、「自分は遠い国から乙女に遣わされて来た者だが、今すぐに贈り物をしてもらいたい。もし、ここで贈り物がもらえないのであれば、贈り物の内容も、乙女の名前も明かされることはなくなってしまうだろう。」ということを述べる。王は、ゴーヴァンの勧めもあり、この強制的贈与を承諾する。この際小姓は「自分は、あなたがたが恥をかいたり、損害を被ったりするようなひどいことは考

えていない」(v. 181-182)と述べるが、小姓が取り出したマントのせいで、小姓やその女主人である乙女が望んだかどうかに関わらず、宮廷は大混乱に陥るのである。小姓は、このマントは妖精が作ったものであると説明をする。

La feë fist el drap une oeuvre  
qui les fausses dames descuevre.  
Ja fame qui l'ait afublé,  
sē ele a de rien meserré  
vers son seignor, sē ele l'a,  
ja puis a droit ne li sierra ;  
nē aus puceles autressi,  
sē ele vers son bon ami  
avoit mespris en nul endroit,  
ja plus ne li serroit a droit  
que ne soit trop lonc ou trop cort<sup>(10)</sup>.

(v. 201-211)

(妖精は、不実な女性を暴くような細工を服にしたのです。女に夫がいる場合、夫に対して何か道に外れることをしたことがあると、マントが彼女にぴたりとあうことはないでしょう。娘たちもまた同様に、恋人に対してどこかで悪いことをしていれば、マントが、長すぎることもなく、短すぎることもなく、ぴたりとあうということはないでしょう。)

乙女のアーサー王に対するお願いとは、マントのこの性質については黙っておいて、会議に來たすべての女性にこのマントを試着させるということなの

である。王はこれを了承して、宮廷の女たちを呼び出して試着をさせる。

アーサー王の妃とトールの恋人がまず試着するが、二人にはマントは少し短すぎる。トールの恋人の裾の方がわずかに多くもちあがっていたことを評して、家老のクーが「王妃は彼女よりも誠実かもしれないが、それはほんの少しのことというものさ。」(v. 320-321) と口走ったことから、マントの性質が女性たちに明かされてしまう。みなが尻込みをするのを見てアーサー王が、マントを小姓に返したいと提案するが、小姓は、約束は守るようにと行って、決してマントを受け取ろうとしない。

クー、ゴーヴァン、イヴァン、ペルスヴァル、イディエら円卓の騎士の恋人たちが、次々に挑戦するが、先の二人よりも裾が大きいくめくれて、膝やお尻や片足が露わになってしまう。ペルスヴァルの恋人に至っては、留め金が壊れてマントが地面に落ちてしまう (v 543-563)。そのたびに、クーをはじめとする騎士たちにより、どのような不実が犯されたのかについての解釈がなされる。

例えば、イヴァンの恋人がマントを着ると、後ろのすそを一足分ほど引きずることになり、前の裾は膝上少しまで持ち上がるが、これを見ていたガアリエという人物の解釈は以下の通りである。

«[...]»

Li mantiaus, qui arriere pant,  
 nous monstre qu'el chiet de son gré  
 volontiers seur cel costé,  
 et li autres, qui tant li lieve,  
 nous moustre que mout poi li grieve

a lever contremont les dras,  
quar elle veut isnel le pas  
soit la besogne appareille. »  
(v. 524-531)

(「マントが後ろに垂れていることは、彼女が自分の意思で、進んでその側に身を倒したということ。もう一方の側がこんなに持ち上がっていることは、彼女が布を持ち上げることを、ほんの少ししか躊躇しなかったということ。それは、ことがすぐに行われることを、彼女が望んだということだよな。」)

さらに、ゴーヴァンの恋人についてはマントのめくれ方から、彼女が不貞行為を犯す際にどのような体位をとっていたかということについて、家令のクーが解釈を行っている (v. 481-487)。イディエの恋人についても同様である (v. 661-663)。不実が明らかになった女たちは、クーにより、王妃やトールの恋人が待つ椅子に次々に案内されていく。

最後にカラドックの恋人のガルトがいないので、探して連れて来られる。具合が悪くて床にふせっていたというのだ。彼女が試着したところ、マントは体にぴたりとあう。マントを持って来た小姓は、こんなことは初めてだと言って驚き、彼女にマントを与える。

以上のように、アーサー王の物語世界から登場人物と、大諸侯会議の折の冒険の到来、強制的贈与といった、この物語に独特の設定をくみ出して貞操のテストという主題に結び付けているというのが、この作品のあらましである。

## 『マントのレー』における「誠実」(lëauté)

この貞操のテストにおいて、クーを始めとする男性の見物人の間で、男女の間の「誠実」を言う lëauté を論じる言説が展開される。このことを詳しく見ていきたい。王妃と、トールの恋人の試着の後のクーの台詞については、上ですでに触れたが、

——Dame, dist Kex, li seneschaus,

avis m'est qu'estes plus loiaus

que ceste n'est, mes c'est petit !

Et si ai je malement dit,

que plus lëaus n'estes vous mie,

mes mains a en vous tricherie ! »

(v. 319-324、強調は高名による。)

(家令のクーは言いました。「奥方 [=王妃] よ、あなたはの方 [=トールの恋人] よりも誠実ですが、それは少しだけのことです。いえ、これではうまく言いえておりません。この人よりも誠実ということではなく、偽りが少ないということなのです。」)

というものである。言い換えれば、王妃にもトールの恋人にも、パートナーへの誠実さはほとんどないので、どちらがどうということではないと、王妃に対してまことに手厳しいことを言っているというわけである。「誠実な」という形容詞は、このように皮肉な文脈の中で使われている。

この台詞は、この次にクーの恋人の不実が明らかになる場面の伏線になっ

ている。マントの性質が明かされて、女性たちが尻込みをする中、クーは自信満々に、自分の恋人に声をかける。

« Damoisele, venez avant.

Oiant ces chevaïers me vant

que vous estes lëaus par tout,

que je sai bien sanz nul redout

vous le poez bien afubler.

N' i avrez compaign ne per

de lëauté ne de valor :

vous en porterez hui honor

de cëenz sanz nul contredit. »

(v. 383-391、強調は高名による。)

(「どうぞ前に。この騎士たちの前で自慢しますが、あなたの誠実は完璧です。だから、その服をびたりと着られるだろうことが私にはわかっています。まったく疑っていません。あなたには、誠実さにおいても、人品においても、並ぶ者がいません。今日は、異論なしに、この場で栄冠を勝ち取ることでしょう。)」

クーの恋人は、美しい方々がたくさん戸惑っておられるところで、自分が先に試着するのは烏滸がましい、人々に悪くとられるのではないか心配だと言って拒むが、クーは、まったく疑う様子を見せない。

——Ja mar en douterez maugré,

fet, Kex, qu'eles n'en ont talent. »

(v. 406-407)

(「不興など心配に及びません。」とクーは言います。「みなさん、そんなことをする気はありませんよ。」)

ところが、娘がマントを羽織ると、後ろはふくらはぎまでしか垂れず、前は膝が見えてしまう。クーの台詞に出て来る「誠実」は現実には存在しなかったというわけである。それを見た慈悲なきブランという騎士が、クー達をからかって、皮肉たっぷりに彼らは「誠実ですね」という。

« Voirement n'i avoit son per !

ce li a dit Bruns sanz Pitié.

Bien doit estre joiant et lié

mesire Kex, li senechaus :

voirement estes des lëaus ! »

(v. 414-418、強調は高名による。)

(「並ぶ者がいないとはこのことですな。」と慈悲なきブランが言います。「家令のクー殿は、心楽しく喜んでいるに違いない。あなたがた [= クーと恋人] は、本当に誠実ですね。」)

この後、試練を受ける女性たちの裾のずれかたはますます大きくなり、その度に好色な解釈と、からかいがなされたということは、全体の要約で述べた通りである。それを見た女性たちはますます尻込みをするわけだが、それは、作品冒頭で王が「新しいできごとが起こるまで」は取らないと言っていた食

事の時間をますます遅らせることとなる。最後から二番目にイディエの恋人が試練を受ける際には、空腹が手伝って宮廷のいらだちは最高潮に達している。こうなると、女性の尻込みは、やましいことがあることの証拠に他ならないように見えてしまうことになる。イディエは、

Ydiers en apela par ire  
s'amie, qui lez lui s'ëoit,  
quar au matin de voir cuidoit  
que nule ne fust plus loiaus :

(v. 616-619、強調は高名による。)

(イディエは怒って、隣に座っていた恋人に声をかけます。というのも、その日の朝は、女で彼女以上に誠実な者はいないと本気で信じていたからです。)

と描写されている。ここでも、「誠実な」という形容詞は、イディエがかつて存在するものとして夢想していたが、現実にはないであろうと思っている恋人の性質として使われている。もはや、イディエ自身ですら、恋人の誠実を信じられなくなっているということである。案の定、マントがめくれあがってお尻が丸出しになると、それに対するクーの言葉は、以下の通りである。

« [...]   
vous n'en poez que .III. trover  
esproveës de lëauté.  
Li siecles est si atorné

que chacuns en cuide une avoir.

Vous cuidiez jehui savoir

la lëauté qui en vous ert.

Mal est couvert cui le cul pert !

[...] »

(v. 654-660、強調は高名による。)

(「誠実であるという証しをうける女性は3人と見つけれない。[しかし、] みな、そのうちの一人が自分のものだと思っている、というのがこの世のならわしだ。あなたは今まで、[恋人が] あなたに払っている誠実がいかなるものか知っていると信じておられましたね。尻丸出して寒々しい！」)

最後の一文の表の意味は、イディエの恋人が上半身はマントで隠していても、尻が見えているということで、ここでの状況そのものを表しているが、これは諺（モラウスキー1179 番）である<sup>(11)</sup>。ディ・ステファノの熟語辞典の第二版によると、一般的には「頭隠して尻隠さず」の意味で使われたようである<sup>(12)</sup>。さらに、今回使った対訳本を編集したナタリー・コブルは、この部分に注をつけて、pert という語が paroir（顕れる）とも perdre（失う）ともとれることから、ここでは「女の尻を失った男、すなわち寝取られ亭主となった者は、そのことを隠しておけない」という裏の意味を持っているのではないかという読みを提示している<sup>(13)</sup>。

この最後の一行がすべてを裏切っているというものの、それよりも前の部分は、聖職者による傲慢の悪徳を諫める説教の色彩を帯びている。人はおのれの現実を顧みらないで、自分は「誠実」という美德を持ったとても希少な

女性を恋人や妻として持っていると思ひ込みがちである、というわけである。宮廷中が女性の誠実について諦めの境地に達しているというわけだが、マントを持って来た小姓にアーサー王が約束した以上、それを果たすために試練は続けられる。以下に騎士たちの気持ちが描写されている一文を引用する。

Mes auques les reconfortoit  
ce que li uns ne pooit mie  
dire de l'autre vilonie  
que il meïmes n'i partist.

(v. 688-691)

(しかし、お互いに、自分がそこにまきこまれることなしに、相手を悪く言えないという状況は、彼ら [= 騎士たち] を少し慰めた。)

クーはこの雰囲気を受けて、以下のように述べる。

« [...]   
Igaument sont parti li gas,  
quant chascune en porte son fes.  
Bien doivent estre des or mes  
par nous chieries et amees,  
quar bien se sont acuitees !  
Ce nous doit mout reconforter :  
li uns ne peut l'autre gaber. »

(v. 694-700)

（「女たちがみな、罪を背負っているのであれば、からかいも等分されているということだ。今後は、女たちをかわいがり、愛してやらなくてはならない。務めは果たしたのだから。お互いに他人のことを言えないというのは、おおいに慰められるべきことだ。）」

言わば、みな五十歩百歩なので、争いが起こらなくてよいと述べているというわけだ。これは、勲功をたてた者がみなへの賞賛を勝ち取るという、アーサー王宮廷、ひいては騎士道物語の根幹を否定するものである<sup>(14)</sup>。ゴーヴァンの反論はこのことをよく言い表している。

« Ici a mauvés geu parti.  
 Je ne sai le meillor eslire,  
 que la meillor en est la pire,  
 et ce seroit anuiz et tort,  
 se nostre anui estoit confort !  
 [...] »  
 (v. 702-706)

（「その反論は解せぬな。最良の女性と最悪の女性が同じであれば、最良の騎士を選ぶことができないではないか。悲痛が慰めになっているなどということがあれば、それは不愉快で間違ったことというものだ。）」

貞操のテストがきっかけとなって、アーサー王の宮廷は崩壊の危機を迎えているというわけである。最後にガルタがマントをまとうて見事にカラドックへの誠実を示したことは先に述べた通りである。乙女は小姓からマントを贈

られ、恋人たちは宮廷中から賞賛を受ける。めでたし、めでたしというわけであるが、待ちに待った食事中、そこにいる騎士たち怒りに満ちているとされている (v. 888-889)。カラドックとその恋人の誠実は賞賛するけれども、自分の恋人が不実であったことへの怒りは覚めていないというわけだ。

食事が終わるとカラドックは早々に乙女を連れて自分の国に帰ってしまう。コブルは、この作品の結末部を、マリー・ド・フランスの『ランヴァル』の結末で主人公がアーサー王の宮廷から妖精の恋人へと去ってしまうことと重ね合わせて、人間の宮廷においては、恋人双方が変わってしまわず一途な愛が貫かれることはありえない、というメッセージをそこに読み取っている<sup>(15)</sup>。これは、騎士になる前の若者が、出世を夢見て奥方に奉仕をするのに対して、奥方は一種のおとりとなって若者をたくみに誘惑しつつ、欲望を高めたり、そのガス抜きをしながら、彼を宮廷から離さない役割をする一方、若者は機がくれば新たなチャンスを求めて次の宮廷に去るというのが封建社会における宮廷のあり方だというジョルジュ・デュビーの説をうけてのことである<sup>(16)</sup>。このような解釈にたてば、『マントのレー』という作品の根底には、人間の宮廷における男女の間に、誠実は成立しないという皮肉が存在するということになる。この作品では、「誠実」(l'auté)という言葉の多用は、ないものを語るためだったということがわかる。

## まとめ

以上のように、『マントのレー』においては、女たちの不実、あるいは宮廷における恋の不実が明らかになるたびに、皮肉たっぷりの文脈の中で「誠実」という言葉が使われている。男女の間の誠実の存在がますます疑わしくなっ

ていく文脈の中で、「誠実」を表す *l'œauté*, *l'œal* という語が使われている。

序文において紹介した拙論では、キリスト教の神と主君への「誠実」が主題であるはずの『ロランの歌』において、そこにあふれているはずの「誠実」が言葉としては語られないというパラドクスについて述べたが、本論では、その反対の現象として『マントのレー』をとりあげて、誠実がないところでこそ「誠実」という言葉が語られているという現象を紹介した。12世紀と13世紀の境目にあっても、フランスの物語での「誠実」は、それを打ち消す文脈でこそ、饒舌に語られているという現象が確認できた。

#### 注

- (1) シンポジウム「聖と俗の *foi & triuwe*——中世の宮廷文学における「誠実」・「忠誠」・「信心」」、日本独文学会 2016 年度秋季研究発表会、2016 年 10 月 22 日、於関西大学
- (2) 高名康文『『ロランの歌』における「誠実」と「不誠実」、渡邊徳明編『聖と俗の *foi & triuwe* ——中世の宮廷文学における「誠実」・「忠誠」・「信心」』（日本独文学会研究叢書 127）、2017、p. 33-49（日本独文学会のウェブ冊子で、[http://www.jgg.jp/modules/organisation/index.php?content\\_id=406](http://www.jgg.jp/modules/organisation/index.php?content_id=406) よりダウンロードができる）
- (3) 松原文「アーサー王物語における *triuwe* ——『パルチヴァール』と『イーヴァイン』をクレティアンの原典と比較して——」、『聖と俗の *foi & triuwe*』、p. 50-66（p. 50-54）
- (4) 同上、p. 57-58
- (5) フランス国立図書館 fr. 837 写本を底本とした「*Le Manteau mal taillé*」, éd. N. Koble, *Le Lai du cor et le Manteau mal taillé. Les Dessous de la Table ronde*, Édition Rue d'Ulm/Presses de l'École normale supérieure, 2005, p. 53-101 による。*l'œauté* は 8 例（第 326, 346, 389, 655, 659, 833, 872, 873 行）、*l'œal* は 5 例（第 320, 323, 418, 475, 619 行）である。ただし、この写本ではこの作品は第 868 行で終わる。872 行と 873 行は、この後にエピソードを持つフランス国立図書館 fr. 1104 写本から借りてこられた例である。
- (6) « *Le Lai du cor* », éd. N. Koble, *Le Lai du cor et le Manteau mal taillé*, *op.cit.*, p. 17-52

- (7) *The Continuations of the Old French Perceval of Chrétien de Troyes*, éd. W. Roach, Philadelphia : University of Pennsylvania Press, vol. 3, v. 3092-3254 (mss. A, S, P, U)
- (8) Raoul de Houdenc, *La Vengeance Raguidel*, éd. G. Roussineau, v. 3864-3831
- (9) *Le Roman de Tristan en prose*, éd. R. L. Curtis, Leiden : Brill, 1976, t. 2, § 526-531
- (10) 以下、すべての引用は、「Le Manteau mal taillé», éd. N. Koble, op. cit. による。
- (11) J. Morawski, *Proverbes français*, Paris : Champion, coll. Classique français du Moyen Âge, 1925, p. 43
- (12) G. Di Stefano, *Nouveau dictionnaire historique des locutions. Ancien français, moyen français, Renaissance*, 2 vol., Turnhult : Brepols, 2015, p. 444
- (13) « Le Manteau mal taillé », éd. N. Koble, op. cit., p. 90, note 18
- (14) N. Koble, « Les Dessous de la Table ronde », éd. id, op. cit., p. 140-141
- (15) ibid., p. 126-131
- (16) コブルは、ibid., p.132 においてデュビーに言及している。デュビーの論については、たとえば、『マントのレー』への言及もあるジョルジュ・デュビー『中世の結婚——騎士・女性・司祭』（篠田勝英訳）、新評論、1984、p. 353-368（『宮廷と『若者集団』』、「文学作品に見る結婚の諸相」）を参照。